

## 私の戦争体験

浮羽郡田主丸町 梅崎 文江

太平洋戦争以来農家にとっては大変でした。働き盛りの男の人は次から次と召集され、出征して行きました。残されたのは年寄と女と子供達です。農繁期には出征している家庭には、学生達が奉仕作業をして手伝いにいました。

弟「一男」（長男）も学生でしたので奉仕作業として手伝いに行きます。家でも一町八反の農作業で、朝は星を眺めながら暗い内に稲刈りに行きます。当時は農機具はなく、ただ脱穀機だけでありました。昭和17年3月弟も実業学校を卒業し、父と共に農業に従事するようになり、とても助かりました。私も18年1月女子青年団の勤労奉仕団に召集され、15日間小倉へ行き、並んで弾磨きをした事を覚えています。黒のモンペに地下タビ、鉢巻姿でした。今のようによく格好良いものではありませんでした。着物式でヒモのついたはかま式のモンペです。食事は玄米飯でした。任務を終え、1月31日帰宅しました。

それより戦局益々酷くなるばかりで、弟も忠孝の教育を受けた若者の愛国心に燃ゆる決意は固く、『農家の後継ぎはするから、整備兵でも良いから試験を受けさせてほしい』と父母を説得し、試験に合格。19年4月18日（18才と5ヵ月）、万才の声に送られ、よろこび勇んで故郷を後に四国松山飛行部隊へ入隊しました。私も5月11日結婚。農繁期には実家の手伝いに来ていましたけれど、主人も7月召集され、再び実家に帰り両親の手伝いに励みました。その間空襲で荷物は全部焼けてしまいました。弟も3ヶ月間整備兵として訓練を受けるも選抜され、重爆機の搭乗員候補として、満州（現在、中国東北地方）チチハル、熊本、浜松を転々として訓練を受け、昭和20年5月21日敵基地硫黄島攻撃の命下るや重爆撃機飛龍の航法として出撃、不幸にも愛機に敵弾を受け、敵飛行場に自爆、全員戦死しました。入隊して1年1ヶ月の短い軍隊生活は終わりました。

大君の御旗のもとに死してこそ 男と生まれし甲斐はありけり 一男

20年7月21日午後7時半、一通の電報がきました。至急官報で内容は、『21日部隊葬をするから参列されたし』の内容でした。届いたのが21日夕方、22日早朝、両親 浜松へと発ちました。家を出る時母が私達に云った言葉は、『お国のために捧げたのだから人がこられても涙は見せてはならぬ。留守は頼む』と云って出掛けました。両親の心境如何ばかりかと思うと心が痛みます。当時村では戦死したら婦人会の方々が白エプロンに国防婦人会のタスキをかけてお悔やみに来ておりました。24日だったと思います。空襲のはげしい中に、白木の空の箱を胸に抱いて帰って来ました時の父母のやつれた姿は痛ましく、たどえようもありませんでした。箱の中には小さな人形、愛用のコンパス、三角定規が入っていました。荷物はきちんと整理され、荷造りされてありました。すべて見るもの涙々でした。家から出した手紙。父母の写真はありませんでした。多分自分の身につけて出撃したのでしょう。『農家の後継ぎは

するから、整備兵でも良いから』と必死に頼んでいった弟よ。出撃前夜何を思い、何を考え、遺書を書いたのかと思うとたまらなく、思い切り抱きしめて泣きたい心境です。最後の出撃前の写真は写真館より直接送って頂きました。父母の許へ届いた時にはもうこの世の人ではありませんでした。母が『自分の子にはできすぎた息子だった。お国のために捧げた生命だもの』と淋しい中にも自分を励まし、慰めていたようです。

### 遺書

淋●の候父母上始皆々お元気の事と拝察致します。一男も色々御心配をかけましたが長年の願ひ叶って出撃の宴の末席を汚す事が出来ました。

春ならば散りゆく桜偲びつつ 我も散るらむ靖国の花

では父母上始皆々御体御大切に暮々も健康を祈ります。桜花の下で祖父さんに手柄話をしたら喜んでくれる事でせう

佐々木一男

父母上様 昭和二十年五月二十日

二雄（弟）へ

若き者は常に明朗で何事も「熱を持ってやれ」

一、精神力

自分で信じた事は何処までもつらぬき又堅忍持久●固たる意志 不屈不撓の気力だ  
之を養へ

二、体力＝特に持久力

三、明朗＝心に秘密をもつな

では元気に弟妹を指導して父母を助けて行って来れ 己のかわりに

弘へ（三男）

一、元気でやれ

二、正直

三、勇気 此はから元気ではない眞の勇者は平常は温和で「いざ」と言ふ時に自分の力を遣  
かんなく發揮する事だ。大きくなったら二雄へ書いたと同じだ。

チヅ子（妹）

一、温和＝女らしく

二、従順すなおな人間になれ

三、明朗

では皆兄弟同志良く助け合って仲良く暮らしてくれ、兄さんも家へ居る時色々無理を言ったけど許してくれ。姉上も元気に父母をお願いします。幸福に暮らして下さい。

昭和二十年五月二十日

一男 以上

昭和20年8月15日正午、重大ニュースがあるからラジオのある家で聞くように連絡がありました。当時テレビは勿論、ラジオも各家庭にはありませんでした。丁度正午、陛下より直々のお言葉で戦争終結、日本降伏の事実が知らされました。誰しも我が耳を疑う程でした。間もなく終戦と共に内地勤務の方々が復員されて来ます。それ迄勝つことのみ信じていた母の張りつめた心の糸が切れたように、子を想う母心が変わりました。毎日仏様の前に座り、泣いていました。小さなつぶやくような声で、泣きながら『戦争が3ヶ月早く終わってれば一男も…。身体に障害を負ってでも良い、帰って来てくれ』と泣いていました。私達は言葉もなく、ただ泣きながらだまって見守るだけでした。日が経つにつれて少しずつ自分を取り戻し、落ちついて来ました。父は男だから口には出しませんでしたが『くやしい』の一言でした。すべての意味を深く感じ、心中如何ばかりかと思えばたまらなくくやしさ一杯です。子が親を慕う気持、親が子を想う愛は海よりも深く、美しくそびえ立つ富士の山より気高く感じます。父も昭和50年7月他界、母も平成2年10月他界、今頃天国で手柄話に花を咲かせているのだろうと自分を慰めています。戦前の教育で忠孝の教えを学び、最後迄忠実に守り、19才と5ヶ月の短い人生は終わりました。

教育がいかに人の性格を左右するか、教育の大切さを沁々感じさせられます。50回の法要も終われば供養も一区切りついたような気がします。やがて誰しも必ず訪れてくるこの世の別れ、その時一男の姿が眼に浮ぶ。生きている者にできることとして、在りし日の生活、心情を記録に残し、後世に伝えることも大きな意味のあることと思います。私も残された人生を弟に恥じないよう有意義に精一杯生きて行きたいと思います。

また、21年だったでしょうか。父の弟がフィリピンより着のみ着のまま、親子4人引揚げて来ました。一番下の女の子は船の中で息絶え、海の中に葬ったと聞きました。また不幸にも引揚げてから次の女の子も病気で亡くなりました。

住みなれた土地を後に、着のみ着のまま馴れない内地に引揚げての重なる不幸に両親の心中如何許りだったことでしょう。敗者のみじめさを沁々感じさせられ、辛い思い出です。月日の経つのは早いもので終戦後50年経ちました。内地で戦地で多くの犠牲になられました方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。 合掌